



音吉の足跡

- 〔住居〕オーチャードロード
大統領官邸の南 現イスタナパーク他
- 〔教会〕プレビテリアン教会（長老教会）
- 〔墓地〕プキティマキリスト教墓地（現病院）
- 〔会社〕ベッカーベルグター商会
- 〔親族の墓〕フォートカニングパーク
 - ・音吉の娘エミルーイザ・オトソン
 - ・妻の母ケイトブラウン
 - ・妻の弟
 - ・ギュツラフの妻メアリー・ギュツラフ
- 〔最期の地〕シグラップ地区
アーサーズ・シート

遣欧使節団の足跡

文久2年（1862年）
1月19日 英国軍艦オーディン号で寄港

- 港コーリヤ栈橋へ上陸
フォートフラフトンより祝砲上がる
- 上陸コースーニューブリッジロード
↓
コールマンブリッジ
↓
ヒルストリート
↓
コールマンストリート
- ホテルーアデルフィ（音吉が訪問した宿舎）

音吉は150年前のシンガポールをなぜ終の棲家としたのか

- 1 上海の英国デント商会で働く音吉にとって、アヘン戦争、そして太平天国の乱と続く中国内での戦乱体験は、祖国日本では考えられない事であった。しかし、祖国日本への帰国の思いを断ち切らざるを得なかった音吉が、選んだ地はシンガポールであった。
- 2 音吉は、祖国の鎖国政策がゆえに帰国を拒否された。そんな境遇にあってこそ、世界の動向を学んだ音吉にとっては、日本の進むべき道が、平和な開国と確たる国防の体制であることは明らかであった。外にあって、自分が祖国に出来ることは何か、を思い続けたことである。
- 3 大国英国に身を置く立場から、東南アジアの中心地としてシンガポールを適地と選んだことは、若くしてアメリカ、欧州への航海の中で身についた知恵であったと思う。しかも、スエズ運河の大事業が1858年より着工され、完成が近づきつつあることは、ヨーロッパとの交易も視野に入れ、最適の地と考えたのでしよう。
- 4 音吉は、ハワイへも幾度も訪問し、ふるさと小野浦に良く似た風景をどんなにか思ったことだろう。それに最も似ているのは、シンガポールであったと思う。うしろに小高い山を負い、前は世界につながる海がある・・・温暖で美しいシンガポールをこよなく愛していたことであろう。
- 5 英国を祖国とする妻の親族と家族の幸せを考え、交易への夢とその拠点として、シンガポールを終の棲家としたのではないのでしょうか。